

Urban Design Lab. Magazine

2014.06.24 vol. 218



世界遺産のこれから

T H E F U T U R E O F W O R L D H E R I T A G E

ユネスコ世界遺産委員会開会式でスピーチ p.6 / 建築遺産の価値とは—富岡製糸場見学記 p.6 / 少し長めの卒業設計—レモン賞受賞 p.7 / 博士論文執筆の軌跡、そしてその先へ—中島助教、松井さん、論文奨励賞受賞! p.8 / 都市・本—パタン・ランゲージ p.11 / 動と景の結び目—土木計画学会委員会賞受賞 p.12

東京大学
工学部都市工学科/
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

編集長：高梨 遼太郎
編集委員：道喜 開視 原 由希子 柄澤 薫冬
柴田 純花 中村 奈菜美 益邑 明伸



世界遺産のこれから The Future of World Heritage

—西村先生へのインタビュー—
-Interview with Prof. Nishimura-

今月、日本で18件目となる世界遺産登録がユネスコ世界遺産委員会で決議されました。国際記念物遺跡会議（ICOMOS）副会長を務められたこともある西村先生にこれからの世界遺産について伺います。

＊

高梨 お時間をとっていただきありがとうございます。今回は世界遺産委員会が開催されるということで、世界遺産の保全と周辺都市との関係などについてお尋ねしたいと思っております。どうぞよろしくをお願いします。

西村先生（以下敬称略） はい、よろしくをお願いします。

富岡製糸場の世界遺産登録

高梨 早速ですが、世界遺産登録をされる富岡製糸場のお話を聞かせて下さい。訪れた時に感じたのが世界遺産登録基準と

サイトが発信していることのギャップでした。登録基準としては、フランスから入ってきた技術が革新し世界に広がっていったことや、遺産群が大量生産に特化した建築物群であることなどであったと思いますが、目に付くのは女工のキャラが多かった気がします。こういうギャップについて先生はどうお考えですか。

西村 登録基準ってというのは少し特別で、世界に通用するストーリーを作る必要があるんだよね。例えば、日本人であれば生糸は日本の近代化に大きく寄与した、外貨獲得の一番の手段であったなどということが大切だと思う。でもそれだと世界にとって大切だとは言にくい。日本が非西洋国で初めての近代化だから価値があるという言い方もできるけど、各国の近代化がそれぞれの固有性を持っているからなかなか認めにくい。

今回は近代化などという話を抑えて、日本での技術進展が絹の大量生産・大衆化に寄与し、ヨーロッパ中心に服飾文化が花開いたという持っていき方をしたんだよね。それまでは絹は本当に高価で一部の貴族しか持てなかったわけだから。そしてそれに関連が深いサイトだけを選んでシリアルノミネーションをしたんだよね。ここは貯蔵のあり方が変わったとか。地域づくりの観点から考えると多い方がいいんだけど、絞って持っていったんだよね。

高梨 シリアルノミネーションは観光客としては回りにくいと思ったのですが、そういう観点だったんですね。

西村 別に世界遺産は観光のためにあるわけではないからね（笑）

高梨 そうですよ。あとは、工場の周辺のまちですが、道路に新しいペープメ



富岡繰糸場には昭和62年に操業を停止した際の自動繰糸機が保管・展示されている。

フィリピン・コルディリエーラの棚田群。棚田の規模としては、世界最大ともいわれている。1995年文化遺産に登録。

ントであったり改装された蔵にアートが入っていたりと必ずしも工場と関連のない整備が多くあったと感じたのですが。

西村 そうなの？でも、あのまちは区画整理をやっていたんだよね。途中までやっていて、僕、区画整理止めたんだよね。

高梨 そうなんですか！？

西村 ちょうど区画整理が始まる時に講演に行っていて。区画整理っていうのは10年とか20年という単位で都市構造が変わって行って、そんなことをしたらせっかく世界遺産に登録しようとしているのに、工場は工場、まちはまちになってしまうから良くないのではないかとやってきたんだよ。そしたら本当に止まってね。

高梨 その通りに言ったんですか？都市構造が大切だと。

西村 そう、進めていた人からは抗議の手紙とか来たけどね。本当に世界遺産のことを考えるならやめるべきだと言ったね。だから本当はもう少しまちとのつながりがあると理想なんだけどね。産業遺産は労働者の人たちの生活にもフォーカスするところが多いんだけど、今回の世界遺産としてのストーリーは技術に注目していたんだよね。

あと僕が富岡に関してよくしている話があってね。それが片倉製糸っていうオーナーの話なんだよね。優良企業で無借金でずっとやってきたんだけど、そこがずっとあの工場を持ち続けて。昭和30年代くらいの機械もあったと思うんだけどそ

れも保存して、自分たちの社員教育の場にしてたんだよね。確かに片倉製糸のルーツにあるんだけど。文化財の指定の話とかもあったんだけど、全部断ってきて、自分たちで守るんだとやってきたんだよね。で、世界遺産の話が出てきたらあの敷地を全部市に寄付した。世界に貢献するのであれば喜んで、ということだよ。普通の企業だったら切り売りして宅地造成をしてそれなりに企業のために利益を出そうとするわけじゃない。でもマスコミがあまり言わないから、是非広めたい。

高梨 それは世界的な価値に気づいていたんですかね。

西村 いや、それは自分達の教育のためだったと思う。そもそも女工を教育する場でもあったわけだから、もともと教育が仕組みに組み込まれていたんだろうね。

世界遺産の抱える課題

高梨 ユネスココースフォーラムに参加してきました、各国の世界遺産に関する問題を聞いてきたんですが、何力国かが言っていたのが世界遺産間の観光客のアンバランスでした。十分に人が来ないために資金的に保全活動がしづらくなるなど聞いたのですが、日本に観光客が足りないなどの問題があるところはありますか？例えば少しアクセスしにくいところにある石見銀山など。

西村 石見銀山はむしろよくやっている。観光客は選定直後にすく来て混乱した

けど、それはしょうがなくて、今は来訪者はピークの半分以下だろうけど問題になっていない。駐車場を遠くに作って、そこからバスが大森まで出ているがそこから坑口までは30分くらい歩かせているんだよね。でもトレッキングコースのようになっていて、観光客は減っているけど滞在時間は圧倒的にのびて、なおかつ満足度は高い。だから数ではないと思うんだよね。どの世界遺産も最初ワッと人が来るけど、そこでチープなものを作ってしまうともう買わないので、単なる観光地としてではなくリッチな生活空間を作っていくことが大切なんだよね。

あとは、高野山も良い事例。和風二階建てだけという厳しい景観条例があって(ほとんどの土地が金剛峯寺からの借地だが)、日本の宗教都市/門前町の中では飛び抜けた景観意識を持っていて、宗教的な感覚を感じる。だって未だに宿坊に泊まるわけだからね。12畳くらいの和室が並んでいて廊下の向こうには見事な日本庭園がドーンとあって、朝には任意でお勤めに行く。外国人は喜んでいて、その後には法話を英語で聞ける寺などもある。世界遺産になっても変にぶれなくて、むしろもっとしっかりした感じだね。

柄澤 高野山は資源を活かして観光が持続的に出来ているのはわかったんですが、富岡製糸場が必ずしもまちと強い関係を持っていないとすると持続的な観光はどう可能だと思いますか。

“最終的にはそれぞれの文化を尊重するという。文化の多様性が相互の理解と尊重、世界平和につながる。”



西村 いろいろとできるのではないかと思う。あれだけ敷地が大きいんだから、例えば教育に使うとか。周辺の小学生は何年生になったら行くなどなると思うんだよね。そこで小学生も小学生なりに、中学生も中学生なりに学ぶ事はあると思う。大人ももちろん。いろんな使い道があると思うんだよね、ただ観光客のためってというのはそれでもいいけど、それだけではないと思うんだけどね。

高梨 フィリピンの友達が紹介してくれたコルディリエラという棚田では世界遺産に登録されてから道路が整備されて、若者が出稼ぎするために都市に移動してしまったり、お土産屋を営むようになったりした結果、灌漑の仕方が分かる人がなくなってしまったらしいです。

西村 ああ、そういう伝統的な集落が世界遺産になっている場合が一番難しいよね、きっと。登録前はマニラから14,5時間かかっていたと思うけど、今では道路が整備されて出稼ぎもできるようになって、若者が流出している。どこでもあり得る問題だね。白川郷でも田んぼをつぶして観光客の駐車場を作ってしまったようなところもあって、文化的な景観は合掌造りと田んぼとセットであるから誰もがやめたいと思っているけど、やめたらあのおばあちゃんが困るとか明らかにわかってしまって、なかなか言いつらいよう。コミュニティも生業がみんな民宿とかになっていくと変わっていつている

みたいだね。

高梨 コルディリエラの場合、その後生産している米をブランド米として経済的な競争力がなくても発売し、頑張っているようですが、世界遺産に登録されながらも観光一色に染まってしまうような小さなまちはあるんですか。

西村 んー、ヨーロッパの都市は小さなところでも観光をあまり一生懸命やっていないんだよね。そういうまちに行くと世界遺産ってどこにも書いてなかったりするから。依存していない都市もいっぱいあるよ。国によって違って、世界遺産にすぎってしまうのはある種アジア的なものなのかもしれないね。みんな世界遺産についてよく知っていて、世界遺産を回ろうとか思うのも日本あるいはアジア的な発想なのかもしれない。

高梨 遺産を回るとい点では、ルンビニでの複数の点的な遺跡を一体的に保全するのはどのようにしたらいいのかというところを困っています。今回ユースフォーラムでカルチュラルルートやシリアルノミネーションなどの話を聞いてきたんですが、いまいち空間としてどうつながるのかわかりませんでした。点的に広がった遺産を上手く一体的に保全している事例ってありますか。

西村 熊野古道が良い例かもしれないね。点的に祠や社がたくさんあるわけだけど、世界遺産委員会ではすごく評価が高かった。巡礼道が多くあって、他では道自体

が世界遺産になっているところもあるんだけど、日本の場合道が少しでもいじっていると史跡にならないんだよね。そうすると点的なものになる。自然に埋もれたような道でつながっているわけだけど、そこを歩くことで清められて、それが修行の一部であった。巡礼と言うとヨーロッパでは目的地があって大聖堂でお祈りするとかだけど、道往きで自然の中にあること自体によって霊力をもらったり感覚が研ぎすまされたりすることが大事であるということ。そのような価値観が道を見ると分かってくれるんだよね。それが違う文化だが尊重するべきものであると。

最終的にはそれぞれの文化を尊重ということ。サイトによって遺産は違うわけだけど、それを文化の違いとして大切に思う。文化の多様性が相互の理解と尊重につながるんだと、そのことが世界平和につながる。こういうユネスコの思想とつながっている部分を見直して、世界遺産は観光のためにあるものではないと再認識する必要があるよね。

若者と世界遺産

高梨 ユースフォーラムはユネスコの「若者も世界の25%を担うステークホルダーであり意見を聞くべきだ」と言う考えで開催されていると聞いた時は少し驚いたのですが、日本でも若者の意見を聞こうなどという論調はできていますか。

西村 次の世代の育成はかなり重要な課題



カタールでのユネスコ世界遺産委員会の開催に先駆けてユネスコユースフォーラムが開催された。今年は23カ国から44人参加した。詳しくは次ページ。

として認識されているものの、経験や蓄積が大きな世界であって、なかなか難しくなっているね。数学みたいに若い人がパツとひらめいてとはいかない。

高梨 ユースフォーラムで議論してきたことの一つで、Outstanding Universal Valueが少し専門家の押しつけになっていて、むしろそこで生活している人たちの様子などOutstandingでLocalなValueをもっと発信していくことをしやすくすることが若者の参加につながるのではないかと考えたのですが、日本でのローカルな価値というのはどう考えられていると思いますか。

西村 集落で世界遺産に登録されているところは生活しているから、それなりにそのような考えはちゃんとしているよね。白川郷は問題をよく指摘されるけど、白川の人は常にいろんな議論をしながら未来をどうするか考えている。石見銀山の森集落だってそう。もともと伝建地区であったところが世界遺産のコアになっているところが多いんだけど、伝建地区になるときに一軒一軒まわって話をしたハンコをもらってとしているから、他のアジアの国とは違うよね。他のアジアの国であったら、大切だとなったらパツと指定するから、住民がおとなしい間は良いけど権利意識が高まってくると大変。日本の場合は指定をするまでは合意形成がすごく時間がかかるけど、あとは早いんだよね。

これからの世界遺産

高梨 今年ドイツがまた世界遺産に登録していますが、ヨーロッパに対する制限というのはどれほど効果があるものなのでしょうか。

西村 文化遺産は一つという点で制限はかかっているし、なおかつ同じようなものは出さないようになっている。だから今度は新しいものとして産業遺産とかが多く出てきているんだよね。20世紀建築であるとか。それ自体はいいことなんだけど、相対的には他国が少なくなるよね。

それで日本でも20世紀建築を入れていこうとなっていて、そうであるなら丹下健三先生の代々木体育館ではないかって話が出ているんだよね。今年がちょうど50周年で登録文化財、指定文化財になれる。アリーナ建築で最高傑作ではないかと楨文彦先生は仰るんだよね。シドニーのオペラハウスとは違って内部空間が外部構造と呼応していると。

高梨 丹下先生すごいですね！ルンビニもあって、広島もあって（笑）そういう中で日本の世界遺産の問題はどういうところにあると思いますか。例えば、インフラの維持のために予算が足りないなどと言われている中で、保全のコストも難しいところがあると思いますか。

西村 僕が思うに、そういう意味では世界遺産に選ばれたものは守られると思うんだよね。でも少しバランスがよくないと

思う。例えば富士山とかは日本人みんながすごいと思っているながらも、当たり前すぎて埋没していたのを、もう一回光を当てたという意味ではすごくよかったと思うんだよね。そしてそのような世界遺産を日本としてはよく守っている。ただ世界遺産になるためにすごくエネルギーとお金を使っているんだよね。バランス的にはもう少し裾野の文化財などにエネルギーやお金を使わないといけないと思う。確かに世界遺産やることで裾野は広がるけど、両方やるのが大切。

柴田 地域としてはどうしても観光などの観点から世界遺産に登録されたいとなってしまうのですが、選定する側としてはどのように選んでいるのですか。

西村 世界に対して説明できるかと固有性で決めている。例えば沖ノ島という宗像大社の沖津宮のある島があって、今でも祭りの時に素っ裸でみそぎをした男性のみが上陸を許されているんだよね。しかも何百年間もの祭器がそのまま置いてあって、その島で見たものは話してはいけないとされている。やっぱりこのような日本の古代からある信仰の形の存在は世界に伝えたいし、応援したくなる。だからあんまり戦略であったり観光であったりという側面はないんだよね。

高梨 なるほど、よくわかりました。今日はお忙しい中、どうもありがとうございました。

（編集：M2 高梨遼太郎）

ユネスコ世界遺産委員会開会式でスピーチ

Speech at the Opening Ceremony of the World Heritage Committee

6月3日から16日まで、M2高梨はカタールでのユネスコユースフォーラムに参加して参りました。ユネスコユースフォーラムとはユネスコの若手の教育と発言の場を設けるために行われているプログラムであり、世界遺産委員会の委員国から一人または二人ずつ世界遺産に携わっている若手を募って行われます。今年は23カ国から44人参加し、前半はカタールの世界遺産見学やレクチャーの受講などのインプットをし、後半には世界遺産委員会と同じ方式での議論を行い、その結論として実際の委員会の開会式で発表される声明文の作成を行いました。



▲丹下先生の広島計画を解説

た。議論の末に発表者についての投票が行われ、選出してもらった結果、ホスト国カタールの王家の女性と二人で実際に開会式にてスピーチまでさせていただきました。

前半のメインイベントはカタール初の世界遺産であるアルズバラの見学でした。アルズバラは都市遺跡であり、18世紀から20世紀まで真珠採り及び貿易によって栄えた都市ですが、その富を狙われ破壊されました。住戸や防衛施設の基礎が広範囲に残っています。しかし、環境はとても厳しく、残っているのは基礎のみであり、目視できるのは建て直したものを除くと砂の微妙な盛り上がりのみでした。

後半では、それぞれの若手が出身とは異なる国の代表役で、国際会議の方式で議論をし、声明を作成しました。内容の中心には世界遺産やその周辺での生活の様子や保全活動を発信するためのユネスコによるウェブプラットフォームがあり



▲世界遺産委員会開会式でスピーチ

ました。この考え方はもともとドイツの女性の提案であったものの、都市デザイン研ウェブマガジンや佐原での記憶アーカイブという研究室での活動での経験と通ずることが多く、普段の研究室の議論の内容を用いて議論に貢献することができました。会議の休み時間には実際に写真などを見せながら、意思統一を図りました。

このフォーラムでは普段できない経験を多く積ませてもらい、23カ国の43人の友達をつくることができました。本当に感謝しております。

(M2 高梨遼太郎)

建築遺産の価値とは —富岡製糸場見学記

What is the Value of Architectural Heritage? -Visiting Tomioka Silk Mill

6月21日にユネスコ世界遺産委員会で「富岡製糸場と絹産業遺産群」が日本で18番目の世界遺産になりました。それに先立ち、6月1日にマガジン編集員5名とD2宋とで富岡製糸場を見学してきました。感想を寄せていただきました。

*

先日、富岡製糸場を一緒させていただきました。今学期より文化庁にお世話になっているのですが、富岡製糸場がICOMOSより勧告を受けたときの文化庁内の雰囲気がとても印象的だったので、この機会に是非見たいと思いました。お祝いの雰囲気が大げさでもなく、かといって控えめでもなく、ふんわり心地よい空気で思わず微笑みたくなるような家族のお祝いみたいな雰囲気だったんです。

いざ足をその敷地内に踏み入れてみる

と、建築遺産としての臨場感が欠けていて、ちょっと残念に思いました。その理由を考えてみましたが、ひとつはインタプリテーションがよくないことではないかと思います。建築遺産の価値はその物的なところに留まらず、歴史の時間のレイヤーの重なりが建築遺産の価値要素を成しています。そのレイヤーを解き見せる工夫が必要と感じました。今の時代はネットを通じて写真や場所の情報を得ることができます。富岡製糸場に足を踏み入れたからこそ発見できる歴史のレイヤーを持ってほしいと思いました。

そして、この理由の延長線上にもう1つの理由があります。安全上の理由と予想されますが、富岡製糸場ではメインの工場建物以外は内部に入れません。くり返しになりますが、建築遺産は物的価値だけで成り立っているわけではありませぬ。空間を体験するという価値、「体験



▲糸を巻き取られる繭のポーズで記念撮影

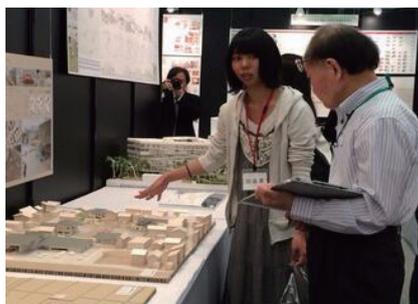
価値」を併せもっています。これが博物館や美術館に展示されている美術品と決定的に違う建築遺産、固有の価値だと私は思っています。唯一公開されている工場と展示室は観光客に空間体験を通して富岡のノスタルジーに浸らせるにはちょっと力不足のように感じました。東京に戻る中、世界遺産へ正式に登録された、その後に富岡製糸場は建築遺産として本当に試されることになるだろうと思いました。

(D2 宋知苑)

レモン画翠が主催する「学生設計優秀作品展」(通称レモン展)において、M1 柴田の卒業設計「在郷でありなす まち庭」が優秀者 10 名に与えられるレモン賞を受賞しました。他の人より少し長めになった卒業設計を振り返っていただきました。

— まずは授賞の感想を。

受賞はまず何よりもお世話になった先生方への恩返しにとらえています。賞を決めるために審査委員とのポスターセッションがあるのですが、坂本一成さんが興味を持って熱心に耳を傾けてくださり、青木淳さんが鋭い質問をしてくださりました。受賞自体よりもそのことが嬉しかったです。



▲審査委員長の坂本さんにご説明

— 福井の東郷を敷地として選んだ理由を教えてください。

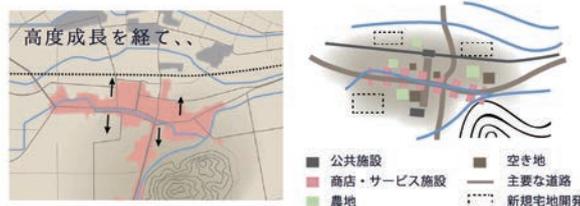
敷地決定で迷走して、福井の地形図を広げ水路網と集落をプロットしていた時に、農村集落とは形態が異なり、スプロール市街地とも一線を画した独立した町を見つけました。(在郷町という分類があることを当時は知りませんでした。)今の時代の地方都市郊外で、どこに設計できる(すべき)なんだろうと漠然と思っていたことと合わせて、敷地を決定しました。

— その場所を見据えているという印象と他の場所に応用できそうな印象の両方があります。

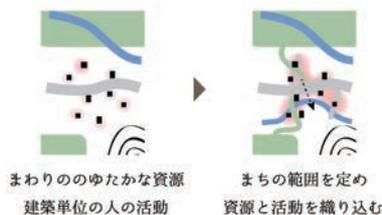
敷地スケールでの一般性というか、構造を抽象化したダイアグラムは最後に出てくるはずだと思っていたので、あえて考えないようにしていました。これは最後に「まち庭」のコンセプトそのものになりました。むしろ悩んでいたのは場所

Site Background

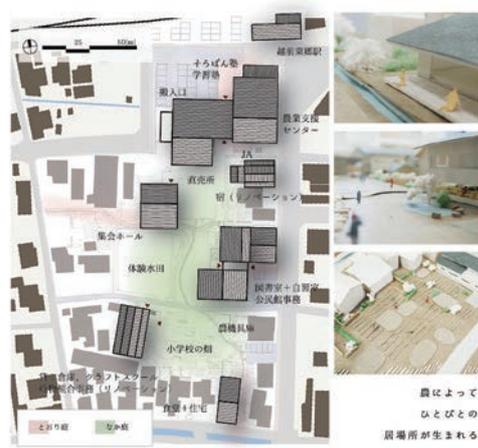
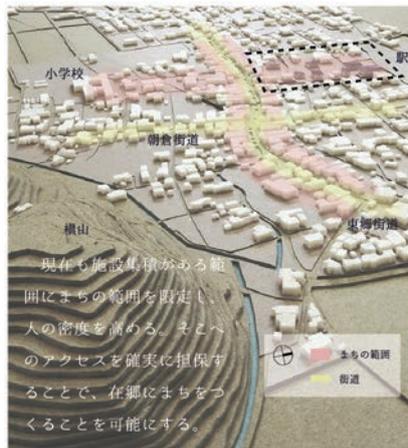
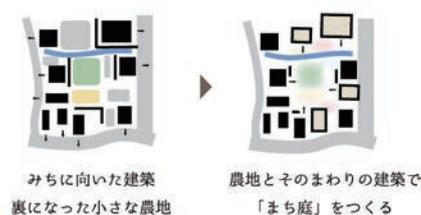
周辺で進む宅地開発。
内部に発生する空地・空き家。
裏になりつつある農地を活かし、
人が居て、活動するまちをつくる。



Resional Planning 在郷で織り成す



Site Design + Architecture Design 居り為すまち庭



性の方です。福井平野の中での東郷(在郷町)の特質とは何かという方向で考え続けましたが、他地域の在郷町と東郷を比較した分析があれば東郷の特質が浮き彫りになったかな、と反省しています。

— プランとしてよいのは当然のこと、その上で表現にこだわっていましたね。

表現し、伝えるところまでが設計だと思っています。都市工の演習だと、考える深さがある一方表現に割く時間が短い。私は話が下手なので、明快な論理構成のパネルと、直感的に空間の良さが伝わる模型をつくらないといけないという思いが強かったです。

— 卒業設計のジュリー後、一人考えこんでいましたね。

不甲斐ない発表をしてしまったので一人反省会をしていました。空間への質問がなく、案がデベロップされるような質

問がこないことが悔しかった。(発表の仕方が悪かったという意味です。)という話し方をすれば、そういう質問をもらえたんだろう、と。

— そこからレモン展まで、3か月ほどです。

まず変えようと思ったのは、論理構成です。ジュリーの反省を踏まえてとにかく簡潔にしたかった。もうひとつは、設計の結果生まれるものの表現です。私の設計で、どういう生活と風景が生まれるのか、その部分で良い設計かどうかを判断してもらいたいと思いました。

— 今後の研究への想いや意気込みをお願いします。

修士研究のスタートは卒業設計期間に考えたことがベースになっています。修士研究も、卒業設計以上に対象と向き合う時間をとりたいです。

博士論文執筆の軌跡、そしてその先へ

—中島助教、松井さん、論文奨励賞受賞！—

The Processes of Writing Doctoral Thesis -Winning the Encouragement Prizes on the CPIJ-

5月23日に日本都市計画学会の表彰式が行われ、中島助教、研究室OBで立命館大学専門研究員の松井大輔さんがそれぞれ2014年の日本都市計画学会賞論文奨励賞を受賞しました。

中島助教の博士論文は、東京都を中心に全国各都市の戦災復興土地区画整理事業を例に、膨大な資料の分析と実地調査に基づき、土地区画整理事業によって多様な空間形成が行われていたことを実証した論文です。戦災復興土地区画整理が各都市の画一化を生んだという従来の評価に対し、設計方針や設計標準から空間形成の思想を読み解き、発掘した一次史料を分析することで、地区の文脈に応じた多様な空間づくりが行われていたことを明らかにしました。中島助教はこの論文で2013年度の日本不動産学会湯浅賞も受賞されています。

松井さんの博士論文は、歴史保全型まちづくりにおいて、住民が主体となるまちづくりの中で住民・市民の関与と行政の関与が、いかに形成し発展するのかを豊富な資料に基づき実証的に分析した論文です。

お2人に論文の読みどころや苦勞、これから試みたいことなどを伺います。中島助教への編集部からのインタビューと、松井さんへの中島助教からのインタビューの2部構成です。

＊

—受賞の感想をお願いします。

中島助教（以下敬称略） 先生方、先輩方、同期や後輩の皆さんとプロジェクトや研究室会議で議論したり、多くのことを教えていただく中で、「いつになったら書くのだ」と叱咤激励していただき、やっと出せた論文で、このような賞が受賞できて本当に良かったです。

—改めて論文を読み返してみているかですか？

中島 練れていないところがたくさんあり、恥ずかしい気持ちと、ひとまず終わらせられたという安心感とが混じった複



雑な気持ちですね。

—先行研究が多くある中で、戦災復興土地区画整理事業というテーマを選ばれたわけですが、その意図するところや苦勞したところを聞かせてください。

中島 自分の出身地、馴染みや縁のある都市をテーマに研究するという事は、自分のモチベーションとつながりやすいことだと思います。そんなことで東京を選んだのですが、東京はある意味、日本中で最も先行研究のある都市なわけで、自分に出来るだろうかという気持ちはずっとありました。これまで区画整理事業は、道路インフラ整備はできたけれど、決して豊かな方向へ導かなかつた、ともするとつまらない空間へと破壊したと言われてきました。「ああ、そうだったのか、残念ですね」で終わってしまっはこれからの未来がないなと思っていました。僕らの生きる21世紀という時代には新しく1から空間を構想する余地はあまりないと思っていたので、こうした区画整理でできた空間をより豊かに活かすためにはどうしたら考えたいと思っていました。戦災復興を選んだのは、ボリューム感だったような気がする。これぐらい事業地区があれば、どこか面白いところがあるだろうと（笑）そんなつもりだった

けど、一方、単純に言って区画整理は土地の交換分合の技術だけなので、できることの限界みたいなものに悩んだというか、区画整理推しだけでは説明できない課題もたくさんあるので、本当に何を論じることができるのかは苦勞しました。

—「戦災復興に関するこれまでの評価」という部分に1章が割かれています。「画一化とは何か」と既往研究に迫っていくところはアツいですね。

中島 これも先ほどの質問で考えていた課題意識というか研究の動機と同じですね。ただ、ちゃんと迫れたかどうかはわからないけど、こういう言い方はとても変なのだけど、僕個人は学術論文のマナーというか、態度がすごく好きで（笑）、これまでの既往研究で明らかになっていること（人間がわかったことの蓄積）がここまであって、自分は今からこの論文でその限界をほんの少しだけなのだけど超えてみせる。っていうことに夢があるなあと思っていて。だからこそ、既往研究に対して最大限リスペクトしたいし、自分もゆくゆくはリスペクトされるような論文を書きたいと思うわけです。で、区画整理は空間を画一化したという言説はあるんだけど、そもそも空間が画一化するってどういうことなのだろうとずっと考え

ていました。そんな時に読み返していた本の中で大谷幸夫先生が、「秩序を求めたが故に秩序を破壊した。これは画一化ではない。都市の無差別化的な状況なのだ。」ということを経戦後の都市形成批判としておっしゃっていて、画一化かそうでないかの二項対立ではない図式から本質をえぐるという視座に強い衝撃と影響を受けました。その意味では大谷先生からあまり進歩的な議論はできていない気もするのですが。

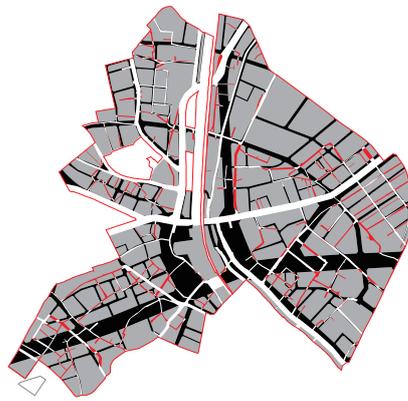
— そんな中、「東京都市計画復興土地区画整理事業地区事業計画書」という一次資料が重要な資料として論文の中に登場しますね。どういう経緯で発掘されたのでしょうか？

中島 この史料を発見できたことで博士論文の強度がある程度保てたと言っても過言ではないですね。東京都が現場担当課で保管している生の資料です。僕が調査していた際に、東京都の戦災復興区画整理は事業清算金の支払いを巡って裁判がまだ続いている状態で、完全な事業完了していませんでした。通常行政資料は事業完了後、数年の期間をおいて廃棄されるか、公文書館に移管されるかするのですが、多くの戦災復興都市で事業計画書は残っていません。東京都はまだ事業が終わっておらず、残っていました。とても幸運な状況だったと言えます。

— 巻末資料としてその「事業計画書」の要約抜粋が納められています。

中島 この事業計画書は東京都公文書館に保管されるべき貴重な資料だと思いますが、今後まだ史料の行き先はどうなるかわからない。そこで、ひとまず自分が見た分については出来る限り、巻末資料で納めれば、博士論文として国会図書館で保管できると思い、途中からはこの事業計画書の内容を残すことがこの論文の大事な役割の一つと考えるようになりしました。

— 「生きられた都市空間としての戦災復興区画整理」として論文の中に「阿波踊り」が登場します。



■08 渋谷駅附近地区



● 変更無し ● 新設街路 ● 廃道

▲中島助教の論文より渋谷駅周辺の街区改変図

中島 論文の最後に補論的に付け足した部分なので、あまりここを取り上げられるのは恥ずかしいのですが、これは、当時やっていた都市空間の構想力調査の一環で、田中暁子さん、永瀬節治さんや後藤健太郎君たちといつも東京中を歩き回っていたときにやったお祭り調査が元になっています。戦後の復興の中で生まれ、現代では完全に定着し、各地で普通に行われている東京の阿波踊りですが、阿波踊りの踊られる空間が高円寺や大塚ではまさに戦災復興区画整理の事業地区が舞台となり、基盤整備ともに発展展開したという経緯があります。両者はそこまで意識的であったとは言い切れませんが、そういう空間の意図や意味として捉えてみようと考えたんですね。やはり区画整理はあくまでも土地の操作なので、その上で行われる都市の活動を何とかひとつは取り上げたいと思い、書きました。当時は、お祭りを楽しんだり、あちこちでかけて行ったり、一緒に都市を体験的に共有して議論する仲間本当に恵まれていたと思います。

— 都市計画の分野で歴史研究を行うということの意義は为什么呢？

中島 偉そうなことを僕が言っても全然意味がないと思いますが、都市を計画することも結局は時間の中での出来事なので、歴史研究を行うこと自体はごく普通のことなのだと思ってきました。知られていなかった史実を明らかにすることが勿論大事なのだけど、これから都市計画を未来に向けて何をしていくべきかを考えるためにこれまでの都



▲東京都市計画復興土地区画整理事業地区事業計画書

市計画をどのように評価するかという史観をちゃんと磨いていきたいです。

— これから先生はどのようなことを研究なさるのでしょうか？

中島 難しい質問ですが、これにちゃんと答えられないと研究者失格ですね。うーん。

狭い意味での都市計画史ではなくて、都市形成史を計画論的視点から描いて、今の法定都市計画だけではない都市の計画史を書きたいです。人がよりよく生きたいからこうやって都市を更新したいという想いが都市を計画するということなのだと思うので。最近、研究室のプロジェクトとは別に、ある東京郊外の住宅地の住環境維持活動の歴史を調べています。これも法定都市計画ではないし、マネジメント計画が過去よりあった訳ではないけれど、自分たちの住む環境を維持したいという未来に対する意志とその活動の積み重ねという意味では活動を伴った暮らしの中の都市の計画史なんだと考えています。そこでは、自分たちが研究しているだけではなく、地域の人たちと共同して実践的に研究を行うことも試しています。

＊

中島 論文を最後書いている時は僕は仕事をしていて関係で研究室にはほとんど行かず、自宅で執筆しており、松井君とはあまり最後の提出の高揚感（笑）をシェアしていないのだよね。いかがでしたか？僕は結構毎日テンションが上がり下がりして、えずきながら書いてました（笑）

松井さん（以下敬称略） 僕の場合は、周

りに恵まれてたと思います。駒場の先端研で、楊さんとボンサンさんと一緒に博士論文を書いていたので、論文の内容や構造について議論をしましたよ。まあ、結局「これで行ける！大丈夫！！」と、励まし合って終わるわけですが…。三人で「ライターズハイ（そんな言葉はあるのか？）」状態になっていたと思います。でも、論文自体は必死に書いていたけれど楽しかったですよ。もし一人で書いていたら、沈んだときに這い上がれなかったでしょうね。ただ、異様なテンションで書いた文章もあるので、いま、改めて読み返すとなくなるとちょっと怖いです（笑）

中島 当初考えていた課題意識はクリアにできましたか？松井君の論文も、これまでの分厚い町並み保全論やまちづくり論がある中での研究だったと思います。

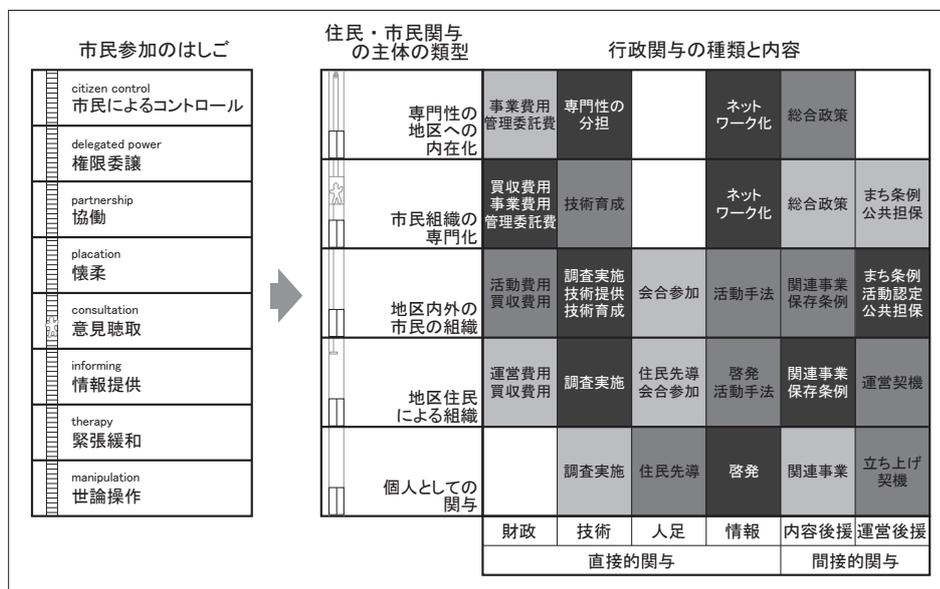
松井 都市デザイン研究室だけでも、西村先生、岡崎先生、下間さんなど多くの先輩方の壁を乗り越えないといけないですからね。課題認識としては「これだけ住民参加の仕組みや景観保全の法律が増えてきたけど、本当に住民による町並み保存運動は進めやすくなったのか？」というところがスタートだったと思います。

博士一年のとき、窪田先生と伸さんと茨城県の真壁に関わらせていただく機会がありました。これは、かつて陣屋が建っていた場所に多目的ホールを建てるという計画があって、規模や住民説明の進め方の問題から周辺住民による反対運動が展開されていたため、そこに協力したというPJです。そこで感じたのは、住民も行政も同じ景観保全というベクトルで進



▲真壁に行った時の写真

1番目が中島助教、3番目が窪田先生



▲ 松井さんの論文より歴史保全型まちづくりにおける住民・市民関与と行政関与の相互関係のマトリックス

んでいるはずなのに、何かボタンの掛け違いがあるような違和感でした。他にも、例えば、卒論で関わらせていただいた函館や鞆PJの事例など、幾つかきっかけがあって、住民・市民と行政の相互関係をどのように考えるかが大事なのは、と着目するようになっていきました。

一方で、既往研究を調べてみると、町並み保存の分野に限らず、圧倒的に市民参加の研究が多いのです。如何にして都市計画に市民の意見を取り入れていくかというのが、都市計画研究の一つの大きなテーマにあったわけですから、当たり前と言えば当たり前なのですが…。反対に行政関与についての既往研究はほとんどない。ですから、最初の課題認識を住民・市民と行政の相互関係に着目しながら、特に行政関与の視点から論じることが、既往研究に対する自分の論文のオリジナリティーなんだと考えていきました。

中島 真壁行きましたね！あそこにひとつのきっかけがあったわけなんですね。

松井 基本的に僕の博士論文はプロジェクトを通して考えてきたことをまとめたものなんですよ。なので、真壁も神楽坂も鞆の浦も出てきます（笑）

中島 市民参加のまちづくり論に対して行政関与から組み立てていく際に方法論などで参考になった研究などありますか？隣接分野は見ましたか？

その一方で僕らは工学分野なので、ある種のこうした社会組織形成もプロセスの中で技術論的に見ていくことが多いと思

います。松井君の作成したマトリックスもまさに関与実態を評価するための指標としてのツールづくりに取り組んでいたのではないかと思ったりする訳です。

松井 もちろん行政学や社会学についても既往研究を勉強しました。この分野でも住民と行政の関わり方の課題というのは指摘されていて、すごく共感ができる内容でした。けれども、それでは実際にどう解決するの？という段階までは論が進んでいなかったように見えたのです。これが伸さんのおっしゃる工学的視点なのかもしれません。そこに都市計画の視点から切り込む意義があったのかなと思っています。また、論文のマトリックスを作ったときにベースとなったのが「市民参加のはしご」です。これを現代の社会状況にあわせて、二次元的に発展させていくような感じ進めていきました。

あと、教育学についても幾つかの文献を読みましたね。ダン・ニューハースの『不幸にする親』とか。行政と住民は、決して親子関係のような主従の関係ではないと思いますが、アナログカルに捉えられないかと思ったのです。要するに、先ほどボタンの掛け違いがあるような違和感と言いましたが、でも立場が違うのであれば考えが違うのは当たり前で、それを理解せず、一方的に片方の論理を押し付けることに問題の本質があるのではないかと思考を進めました。市民参加のはしごを見ればわかるように、住民活動は段階をおって成長していくわけです。これ

らを親子関係に当てはめれば、子供の成長にしたがって子離れをして関わり方を変えていく、そんな流動的な関係性が住民と行政の間にもあり得るのではないかと考えていきました。

中島 なるほど、周辺分野の研究の進捗もおさえた上での論理構築だったわけですね。

今度は逆に研究論文の課題について聞いてみたいです。自分もそうでしたが、書き終わった瞬間から書けなかったことについて思いが巡って悶々とすることもあるかと思います。それがそもそも次の研究の原動力になったりもしますよね。最近の研究の関心も合わせてお聞きしたいです。

松井 研究課題としては、実践的に展開することとケーススタディを増やすことの二つがあると考えています。

前者については、僕の博士論文はこれまでの歴史保全型まちづくりという活動の中から抽出した事実から、マトリックス状の行政関与と住民関与の相互関係の見取り図を作ったものになります。なので、それが実際に地域でどのような効果を持つかを確認できていないのです。そこで、特に両者の関係がうまくいっていないよ

うな地域の課題解決に繋がるかどうか、ある意味で実験的に活用できないかなと思っています。ただ、これは協力してくれる相手がいて初めてできることなので、もう少し時間がかかるかなと思っています。

後者については、博士論文は時間的制約があるため、ある程度の的を絞って事例選出をしたので書ききれていないケーススタディがあると思うんです。卒業後、京都に来て先斗町のまちづくりに入らせていただいているのですが、ここの住民と行政の関係がとても面白いんです。景観やまちづくりの係長レベルの方までが何人も入ってきて積極的にしかけているんですが、でも決して行政主導というわけではなく、そこを指揮しているのは先斗町内の雑貨屋さんのご主人なのです。分担しているけれども、一つのチームとして機能していると言う感じでしょうか。マトリックスでは一言で「専門性の分担」なんて書いていましたが、もっと深掘りしていけそうだなと考えています。

それと伸さんの最後の質問に答えられるかわかりませんが、博士論文の執筆や最近の仕事を通していろんな事例を見てきて、そこから町並み保全を目的化する



▲南砺市の城端

のではなく、町並み保全を通してもっと大きな都市計画上の課題に答えることが出きるんじゃないかと考えてたりします。例えば、人口減少で集落維持が困難になっていくことが予想されていますが、そこに町並み保全として対処できないか、つまり空家再生と町並み保全をセットでシステム化していったりできないか、そんなことを飛騨古川や南砺市の城端で考えさせていただいています。一方で、先斗町ではある程度の保全の仕組みは出来上がったから、じゃあ、原点に戻って先斗町らしさってなんだ？を真剣に考えようとしたり、最近は博士論文のテーマとは少し違う方向の研究を進めていますね。まあ、もともと都市空間とか町並みといったものが好きなので、こっちのほうを優先しちゃってますかね…。うまく両立を図りながら、歴史保全型まちづくりの次の一手は何なのか、真剣に考えていきたいと考えています。

(編集：M1 益邑明伸)

都市/本

読書会から
M1 李美沙

パタン・ランゲージ / C. アレグザンダー 著 / 1977年
邦訳：平田 翰那 訳 / 鹿島出版会 / 1984年

第3回読書会では、C.アレグザンダー著の『パタン・ランゲージ』を読みました。この本は、都市計画家・建築家である著者が自身の経験をもとに、建物や町の作り方に関して、社会の全員の共通言語を示すことを意図して書かれています。地域や町等の大きなパタンから始まり、近隣、建物群等を経て、最後に施工細部の小さなパタンで締め括られる構成になっており、全253のパタンについて言及しています。

例えば「市場のような大学」という項目では、今日の管理過剰で孤立化した大学に対して異議を唱え、高等教育の市場としての大学を奨めています。社会的には、だれでも講座が持て、だれでも授業が受けられるような仕組みが良く、物理的には、主要な建物やオフィスの建つ中心地区があり、そこを中心に集会室や研究室が町中に散らばっているのが良いと述べています。

読書会での話題はまず、都市の構成要素同士はある部分ではツリー構造にもなるが、一方通行ではなく複雑に絡み合っているということを示したかったのだという本書の意図を共有するところから始まりました。次第に、パタン個々の概念は評価できるが、空間全体としてどうあるべきなのかという記述は避けられているという指摘がされ、本書を概念として評価するべきなのか、それともアレグザンダーの実践として評価するべきなのか、といった論点になりました。

個々のパタン同士がどのように関わり合っているのかは、今回の担当だった柄澤くんが本書をセミナーティス構造にした図を作ってくれたので、具体的なイメージがしやすかったです。また、まちづくりにおいて、様々な具体的なやり方を示す方法（真鶴市の美の条例等）と、1つのガイドラインを作成しそれに従ってすすめる方法（再生特区等）のどちらにするか、バランス良く判断できる人が都市デザイナーに向いているという話にまで広がりました。

今回の読書会は、ただ本のまま吸収するだけではなく、読み方一つとっても様々であるということに気づく有意義な会であったと思います。

■ 公共政策デザインコンペ

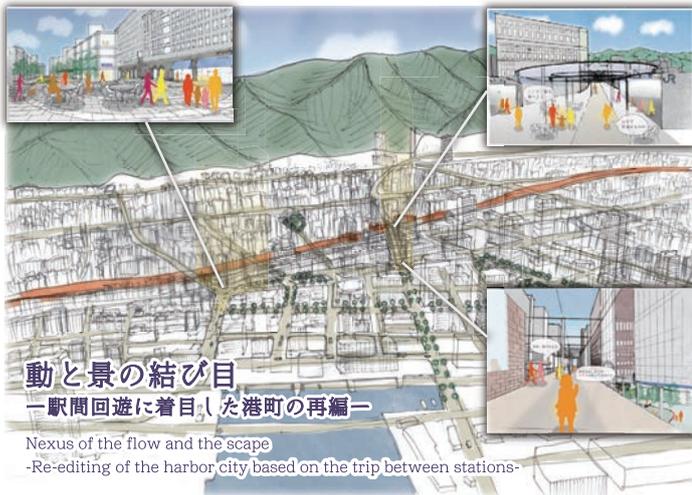
第49回土木計画学研究発表会の公共政策デザインコンペティションにて、M1 中島、柄澤、羽藤研 M1 芝原で、土木計画学会の主催する公共政策デザインコンペに参加させていただき、土木計画学会委員会賞を受賞致しました。6月7日、8日の土木計画学会春大会でポスターセッションを行い、審査員の投票で決定するのが土木計画学会委員会賞です。この賞の受賞は、自分たちが時間をかけてやってきたことが評価されたという意味で非常にうれしく思っています。

■ 参加にあたって

芝原さんにコンペに誘われたのが3月上旬で、まだまだ卒業設計の反省が頭の中に強く残っている時期でした。分析にしても設計にしても手が動かず、また設計に十分な時間を使えなかったという反省が、今回のコンペで活かすように思います。特に空間表現に関しての反省はお互いに強く持っており、それが大パースによる空間表現につながりました。

■ 学んだこと

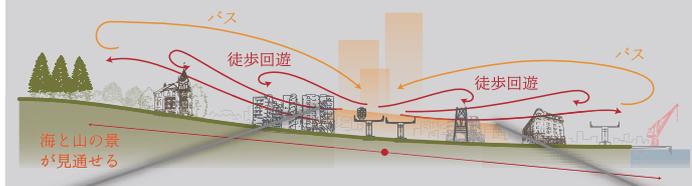
異なるスケールによる多面的な神戸の分析とそれに基づく空間提案を一つの一貫した論理で説明ができたこと、ポスターセッションで自分の提案を短く完結に説明する経験ができたことなどコンペ参加にあたって多くのことを学びました。羽藤研の皆様には発表練習を数多く開いていただき、そこでの反省を再び提案に投げ返すというプロセスを何回も繰り返すことで、提案が整理されていきました。また、都市間分析やアンケート集計、空間提案などそれぞれが得意なことを活かせるようなチームワークが発揮できたと感じています。コンペに向き合ったのは2ヶ月程度ではありますが、それ以上の密度の濃い時間を過ごさせてもらいました。最後に、デザ研の先生方やメンバーから、羽藤研が主体となっていたコンペにもかかわらず提案を形づくる重要なアドバイスを多々頂いたことを、この場を借りてお礼申し上げます。



■ 提案内容

神戸市中心市街地を対象とした、ウォーターフロント部のマスタープランと三宮駅周辺景観整備の提案です。海と山とが近接した地形に規定され発展してきた神戸のコンパクトな市街地に残る愛着を、開発によって壊さず持続させていく計画を考えました。

2つの駅を核として多様な界隈が密に共存しているのが特徴ですが、界隈同士は道路や線路で分断されてしまっています。このような回遊行動の制約を解き、神戸に特有の景観を活かした歩きやすいまちの形を提案します。具体的には、海と山の2つの景観軸を設定し、そこを歩ける空間にします。この軸上に、三宮では3つの小さな広場を連続させ、元町では大きな広場を1つ設けます。この広場は異なる界隈同士をつなげる役割を持ちます。さらに、既存のパスルートに加えて2つの循環バスを巡らせます。景観軸に沿って伸びた回遊はこれらのバスに回収され、各駅へと戻っていきます。このようにして、回遊距離の延伸と回遊パターンの増加を促します。



Information

6月のウェブ記事

20世紀都市遺産プロジェクト、始めました！
漁業の町から郊外へ、浦安プロジェクト始動！
東大生×佐原高校生＝さわら部による、「さわらぼ」スタート！
ISSC 総会プレ調査：遺跡・村・地図
第1回20世紀都市遺産セミナー終了！
知られざる神田の歴史！神田町歩き [是非ご覧下さい：
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/](http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/)

7月の予定

7月1日 研究室会議
7月4日～6日 大槌PJ現地調査
7月7日 浦安PJ現地調査
7月11日～13日 佐原夏の大祭
7月30日～8月3日 Lumbini ISSC

✦ 編集後記

益邑 明伸

今回は世界遺産登録や受賞など明るいニュースが多く、デザ研マガジン始めて以来かつてないボリュームになってしまいました。その分一つのニュースをいつもより深掘りできているのではないかと思います。レイアウトなど行き届かないところも多々あるかと思います。皆様お忙しいと思いますが、時間を見つけて目を通していただければ幸いです。ぜひ感想をお寄せください。なお、来月のマガジンは休刊いたします。